歴史の孤児ハンク・モーガン：

『アーサー王宮廷のコネティカットヤンキー』試論

飯　塚　めぐみ

『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』というタイトルは，共存しえないような異質な要素の対照を強く印象づける。中世と現代，イギリスとアメリカ，貴族社会と民主主義，形式を尊ぶ精神とひたすら実質的な利益を求める精神，慇懃で荘重な言語と俗語特有の調子の良さで相手を圧倒する話術など，このタイトルが含んでいる対照の際立ちは読者にＳＦ的世界の展開を予感させると同時に，歴史がフィクションのなかでどう再現され処理されているのかという期待を抱かせる。

主人公ハンク・モーガンはコルト社の技術員で，機械の類なら何でも自由自在に作り出せる人物という設定のもとで６世紀にタイムスリップする。彼は，郷に入れば郷に従う，とは考えない。奇妙な運命におとなしく甘んじてそこにあるものをそのままに受け入れようとするのではなく，何らかの付加価値を産み出そうとする。この傾向は，南北戦争後に出現したビジネスマンという，その時代の新人類のひとつのタイプに特徴的なもので，従ってハンクは作品発表当時の世相の一面をよく体現したキャラクターだといえる。トウェイン作品の他のキャラクターの中ではトム・ソーヤーに同様のビジネスマン的性格がみられる。『トム・ソーヤーの冒険』の有名な塀に水しっくいを塗るエピソードを思い出してみよう。トムはそもそも罰として命じられたおよそ単調で退屈な仕事を面白いものと思い込ませて友達に押し付け，のみならず彼らから宝物を巻き上げさえする。ハンク・モーガンが遍歴する騎士や宗教的隠遁者たちのエネルギーを金儲けに利用するのも同じで，彼らビジネスマンは無駄に費やされる（と彼らが思う）エネルギーを新しい価値の創造へと転化するのである。目立ちたがり屋のエンターテナー志向であることも付け加えれば，ハンク・モーガンとトム・ソーヤーが共通のタイプに属することは明らかである。

しかし，このように簡単にトムとハンクの共通項を指摘する前に，トム・ソーヤーが彼が活躍する作品のうち主立った二篇 ― 言うまでもないが『トム・ソーヤーの冒険』と『ハックルベリー・フィンの冒険』 ― において異なった描かれ方をしているという点を確認しておく必要がある。これについてはジュディス・フェッタリーが「幻滅：『ハック・フィン』におけるトム・ソーヤー」なる論文で論じているが，第一の点は『ハック・フィン』では残酷さがトムの行動の動因になっていること，第二の点は『トム・ソーヤー』では「ごっこ遊び」の域にとどまっていたものが『ハック・フィン』では遊びの外の世界を侵食していってリアルなものになろうとしている，ということである。[1] ハンクとの比較で重要であるのは第二の指摘であるが，『コネティカット・ヤンキー』を論じる前にこの点をまず『ハック・フィン』で実際に検証しておきたい。『ハック・フィン』でトムは第33章以降ハックを押しのけてフェルプス農場での冒険を一切とりしきるが，周知の通り彼はすでに自由の身であることがわかっているジムを，まわりくどいだけでなく危険を犯してまで手のこんだやり方で救出する大茶番の筋書きを書き，ハックとジムを翻弄しつつ演出と主演を兼ねる。この時トムの行動の規範となるのは『モンテ・クリスト伯』，カサノバ，チェリーニなどの冒険譚である。いずれも如何にして幽閉されている場所から脱出したかの物語で，だからこそジムを英雄的な囚人に仕立てあげるのにふさわしいテクストなのだが，このようなテクストを行動原理としてこれに固執するあまり，少年達は奇妙な行動をとるようになる。例えば，ジムがいる小屋の下に抜け道のトンネルを掘ろうとして，トムはモンテ・クリスト伯に倣って使う道具はナイフでなければならないと言い張るが，ナイフでは幾ら頑張ってもろくに掘り進めないとわかると，「つるはしを使ってナイフで掘ったつもりになる」という手を考えだす。だからトムに「ナイフを取ってくれ」と言われたハックはつるはしを渡してやらなければならない。空想と現実の境界を定めるルールを失った時，トムの行動は通常のごっこ遊びの範囲を明らかに逸脱して狂気に近づく。トムもハックも黒人の迷信深さをさんざん利用するが，その黒人のジムにさえもトムのやり方は「道理にかなわねぇ」[2] とぼやかれるのである。

このようなトムの行動に著しく類似したものが『コネティカットヤンキー』再現される。20章でハンクの騎士としての遍歴に同行してきたサンディーが，豚小屋と豚を見てこれは魔法にかけられた城とそこに住んでいた自分の主人である高貴な人々だと言って豚を抱き締めて嬉し涙を流す，という場面である。物語の

世界と現実の世界の混同は，サンディーが自分の女主人は26年にもわたってある城に幽閉されている，という話を宮廷に持ち込んで来てハンクが遍歴に出るきっかけを作った時にすでに明らかであった。この時，話を聞いたハンクは問題の城の位置など細かい情報を引き出そうとするが，サンディーには距離や方向といった概念が全く欠落しているのでどうにもならない。キャメロットの人々にとっては主観的な事実のみがすべてで，客観的な事実による裏付けの必要性は感じられず，従って口から出た言葉がそのまま「事実」もしくは「史実」となる。『コネティカットヤンキー』の20章あたりまでには宮廷人が多く出てくるが，その特徴は多弁であることである。トム・ソーヤーは読書経験をそのまま行動の規範とし，現実に起こっている事柄の外側に，他人には通用しない自分だけの不合理なリアリティーを構築しようとしていたが，キャメロットの人々はトムの場合でいえば読書マテリアルに相当するようなマロリーの『アーサー王の死』をそのまま生きている。言い換えれば，虚構のテクストを紡ぎ出すことイコール彼らにとってのリアリティーである。彼らが物語を語る様子はハンクによって「歴史工場」（25）「大ぼら工場」（21）[3] といった工業生産の比喩で表現され，まさに歴史が言葉によって生産されていくことを言い表わしている。

言葉が紡ぎだすロマンスの世界に生きる6世紀の人々に対し，ハンクはあくまでそれを裏付ける証拠としての客観的事実を要求する。6世紀人の言葉による歴史生産に対抗してハンクが作り上げようとする「システムと機構」（50）は，如何にしてファンタジーとリアリティーを区別するかがポイントになるのだが，ハンクは目指す「システム」を「文明」と呼ぶ。「文明」の主たる要素のひとつは科学である。機械作りに精通したハンクは科学の時代の申し子でもあるのだが，彼は19世紀で脚光を浴びていたような製品を続々と6世紀に出現させる。40章(ハンクがマーリンとの争いにひとまず勝って，それまで隠していた工場や学校などをいっせいに表に出したところの状況説明）で「数多くの蒸気機関と電力の僕たる機械が稼動していた」（228）と述べられているが，これらが本当に文明の利器といえるか，つまり，これらが人々の生活を便利にし福祉を増したかどうかが明らかにされないまま，電報・電話・蓄音機・タイプライター・ミシンなどと製品の名前を羅列するだけで終わっている。ハンクがもっている科学性は，本来なら19世紀的あるいは20世紀的先取り的特徴として中世と対照させて強調できる可能性があったのだが，科学の魅力も魔力も発揮されない。実人生と同様，トウェインにとって科学（あるいはそれがもたらす発明品）は，実現されない夢のメタフ

ァーなのだ。[4] H. N. スミスは，トウェインにはテクノロジーを文学の題材にするには科学的知識が不足していたのだと指摘している。[5] ハンクが騎士たちおよびマーリンと直接対決する場面（例えば7章，27章，39章）は，たいていダイナマイトかピストルで決着がつけられる。異質なものが直接対決する場面は本来ならクライマックスになるはずなのだが，爆発＝大量殺戮が繰り返されるばかりで，読者は興醒めを禁じえない。

このように，この作品にあらわれている「文明」観をテクノロジー信奉かそれともその脅威を予見したものなのか，という二項対立として捉えようとすると，その試みは作品自体の限界にはばまれてしまう。むしろ「文明」観は歴史観，あるいは何をもって歴史の進歩とするか，という問題にかかってくる。そしてこの点はキャラクターとしてではなく，作者の代弁者としてのハンク・モーガンによって語られると言って良いほど，トウェイン自身の経験の反映として展開される。

トウェイン自身の「文明」観は，『ミシシッピ河上の生活』中の，川の上流地域の描写に顕著に表されている。60章にも及ぶ『ミシシッピ河上の生活』はミネソタ州セントポールに到着する，というところで終わっている。ニューオリンズからセントポールまで，この当時船で10日間の距離だったが，60章の冒頭では両都市の気候の違いについて述べられる。ニューオリンズではまだやっとこれからマグノリアの花が散り始めようかという頃なのに，セントポールではもう雪が降り始めている。季節の訪れは北のセントポールの方がずっと早いし，南のニューオリンズではおそらく年間を通じて比較的穏やかに推移するのだろう。こうした気候・風土の違いは，そのままミシシッピ川上流と下流の風土の違い・「文明」の質の違いでもある。トウェインは南部人であるとはいっても，自分が育ったハンニバルよりももっと下流は道徳的に後進地域であるとみていた。「川下へ」売られてしまうことが黒人奴隷にとって最大の恐怖であったことは，『ハック・フィンの冒険』でジムがそもそも逃げだしたのはミス・ワトソンが彼をニューオリンズへ売るという話を聞いてしまったからであったり，『まぬけのウィルソン』ではロクシーが我が子が「川下へ」売られるのではないかと先回りして心配したから主人と自分の子供を取り替えた，などのエピソードによく表れている。また，トウェインの自伝によれば，彼の子供時代のハンニバルでは「南部のプランテーションは地獄そのもの」で「川下へ売ってしまうぞ，とおどかしても行いの改まらないような奴隷はどうにも手におえないと考えられていた」という。[6]「川下へ」とは地獄へ堕ちる道を示す道標となる言葉であり，川沿いに南へ向かうことは歴

史に逆行することに等しい。

これに対して，『ミシシッピ河上の生活』執筆のため何年かぶりでこの地方を訪れたトウェインが上流地域で目にしたのは，まさに発展途上にある新しい資本主義の時代の都市の姿だった。巨大な工場が立ち並び，ジャーナリズムが隆盛をきわめ，公教育が充実し，教会が数多くある，などの様子がしきりに強調され，このような環境で教育されたこの地域の人々は独立した精神をもっていると評されている。下に引用するのがそのひとつの例である。

> この町［アイオワ州デヴェンポート］には，上流地域のどの町でもそうだが，工場，新聞社，教育施設がある。また，電話もひかれているし，電報制度もある。電気による警報装置，高い給料をとる消防隊，……三十もの教会がある。[7]

一方，『コネティカットヤンキー』では10章が「文明の始まり」と題され，「ザ・ボス」の称号を得たハンクがどのようなシステムを作り始めたかが語られるが，そこでもやはり「工場」，「教員養成工場」，「日曜学校」，「学校制度」，「ジャーナリズム」，「新聞」，などの語がみられるのである。ハンクが作ろうとした「文明」のモデルになったのはトウェインがミシシッピの旅で見たデヴェンポートやセントポールなど上流の都市であろう。

ハンク・モーガンが，いやマーク・トウェインが文明の理想として思い描く光景がミシシッピ上流の新興都市であるとするならば，逆に6世紀のイギリスとして描かれる風景はミシシッピ下流の精神風土を反映している。その後進性は先に指摘した6世紀の人々のロマンス的なものを求める傾向として示されているのだ。トウェインが北部に対する南部の後進性の本質として捉えているもの，それは『ミシシッピ河上の生活』第46章にサー・ウォルター・スコットの悪しき影響として糾弾されている。

> そうこうしているうちにサー・ウォルター・スコットが彼の魔術をひっさげて登場し，力を発揮するなりこの進歩の波を押しとどめ，のみならず後退させてしまった。そして人々が夢や幻や，古くさく意地汚い宗教，退化した政治制度などを愛するように仕向け，...無能で無価値でとうの昔に消えたはずの社会の騎士道を信奉させたのだ。（中略）こうしてそこ［南部］では19世紀の正真正銘・健全な文明とウォルター・スコット風の中世のいかさま文明が混同され

ている。だから実際的で常識的で進歩的なものの考え方や事業が，決闘，大げさな物言い，すでに死に絶え埋葬してやった方が親切であるような過去に属する貧相なロマンティック趣味と混同されているのだ。[8]

ファンタジー世界を作り上げて好んでその中に生き，教会の支配を怖れ，奴隷と貧民の犠牲の上に成り立った政治制度の下にある社会，それはまさに「コネティカット出身のヤンキー」ハンク・モーガンが6世紀のイギリスに見た社会である。ハンクの19世紀から6世紀へのタイム・トリップはミシシッピ川を下る旅をするのと同じ意味合いをもつものなのだ。

しかし，トウェインが「文明」として描写したようなものが真の文明にあらず，と主張していたのがマシュー・アーノルドである。『コネティカット・ヤンキー』の諷刺性が執筆期間が延びる間に強まっていった一因は，トウェインがアーノルドのエッセイ「アメリカの文明」（1888年4月）に対する反論を試みたからだと指摘されている。[9]『コネティカットヤンキー』執筆中の1888年にはイエール大学からM. A. の学位を授与され，当代一流の文筆家として認められたことを思えば，トウェインが積極的にアメリカを代表して発言するようなつもりになったとしても当然であろう。加えて，アメリカ社会全体がイギリスからの批判に対して非常に神経質に反応する傾向が目立つような時代の空気もあった。[10] この問題のエッセイのなかでアーノルドは次のように述べている。

我々は工業，商業が発達し富んだ国，あるいは自由や平等が保証されている国，教会・学校・図書館・新聞社が沢山ある国，などが文明国であるとされるのを耳にする。しかし，人間には成長しようという本性や完璧をきわめたいと願う法則があり，文明をそんなに幅の狭いものとみなす考え方には反発するものなのだ。人間の本性が文明に求めるのは . . . “interesting”という言葉によって説明されるようなものだ。[11]

アーノルドはこのあとさらに“interesting”なものとは高貴さと美を兼ね備えていると定義している。トウェインが『ミシシッピ河上の生活』を書くために旅をしたのが1882年，アーノルドは1883から84年にかけて訪米しているのだから，両者は同時代のアメリカの姿を見ていたことになる。アーノルドはアメリカの文明が“interesting”の要素に欠けているのは，アメリカ人が経済的によりよい暮らしを求めて

絶え間なく移動し，ひとところに落ち着くということがないので「古さ」「永遠性」といった概念が育たず，それ故に美的感覚が養われない，つまりは伝統と呼べるものがない，と言っているのである。これに反応してトウェインが新世界の旧世界に対する，ミシシッピ上流の下流に対する，アメリカ北部の南部に対する，そして自らの現在の過去に対する優越性を，文学の場で確認しようとしたとしても不思議ではない。

その役割を負わされた使者がハンク・モーガンなのである。彼の基本的な態度は6世紀人を子供扱いして見下す，というものである。ハンクはタイムスリップしてしまったことに気づくとすぐに，それならそれでこの機会を生かしてここでのし上がってやろうと考える。「三カ月以内にこの国を思い通りに動かしてみせる」（17），「単にマーケットが未成熟だからといって，うまい話を逃す訳にはいかない」（25），「アーサー王の宮廷に来てしまったからには，この機会をできるだけ生かすよりほかない」（34），などと，非常に早い段階から顕著な上昇志向や個人的な野心を露にしている。ハンクの野心は，はじめのうちは主に経済的な成功を目指しているが，8章あたりを境目にして，企業家から社会改革者へと性格に変化がみられる。これは，おそらく執筆期間が延びる間に，作者の意図がエンターテイメントから奴隷制・貴族制を含む封建制度批判へと変わっていったからではないかと推測される。いずれにせよ，重要なのは，ハンク自身に現実を変えようとする意志がある，という点である。冒頭で述べたように，『ハック・フィンの冒険』のトム・ソーヤーは現実の世界の外にフィクショナルな世界を構築し，それをリアリティーにしてしまうという遊びを楽しんでいた。そこで，ここがトムとハンクの決定的な違いなのだが，ハンクの方は現実世界それ自体を変えてしまおうとする意志をもっている。ハンクは現実世界の外に自分のためだけの虚構世界を作るのではなく，政治家としてまた技術者として，いま目の前にある現実を作り替えようとする。

ハンクの目指す方向，それは（繰り返しになるが）旧→新，下流→上流，南部→北部，過去→現在，というベクトルで示される。そしてそれは非合理的なものを合理的なものに置き換えていくプロセスに他ならない。しかし，結論を先に言ってしまえば，ハンクの挑戦は敗北に終わる。それはまた作者トウェインの敗北でもあるのだ。キャラクター／作者の，敗北／挫折は，第40章以降の最後の5章を検証することによって明らかになる。40章は，ハンクが完全に政治的権力を把握してから3年が経過した時点から始まる。ハンクは奴隷制を含めて封建的な騎

士道を全廃し，いかに19世紀的テクノロジーが6世紀社会に行き渡っているかを得意げに語る。彼はまたこの間にサンディーと結婚し，一児をもうけ，家庭人としても幸せに暮している。まさに得意の絶頂にあるハンクは「いつでもアメリカ発見のための探険隊を出発させる用意ができていた」(228)とまで豪語する。単にイギリス一国にとどまらず，世界史を書き換え支配しようと身を乗り出しかけていたその時，カトリック教会が国家全体に対し破門を申し渡すと，ハンクが掌握していると信じきっていた一般国民がいっせいに反旗を翻す。それだけではなく，純粋に19世紀式の教育だけを受けて育った52人の若者と側近クラレンスを残して，部下の者たちも皆ハンクのもとを去って敵方に回っていたのだ。この状況をハンクはなかなか切実な現実として認識できないが，事情をのみこむと「理屈は事実の前ではなんと空しいものか！そして今の状態はまさに事実以外の何物でもない」(251)と嘆息する。かつてサンディーが豚を抱いて涙まで流す有様を見たハンクは「彼女を見て恥ずかしいと思ったし，人類の存在自体を恥ずかしく思った」(103)とまで言ってファンタジーの世界に生きる人々を批判したが，今や彼がファンタジーに代わるものとして求めた「事実」が彼に襲いかかっているのである。

改革者としての使命に燃えるハンクは，教育・訓練によって6世紀社会に19世紀式の社会を浸透させていこうとした。その一方で，6世紀の人々が頑なに古い思想にしがみついて離れられないのは，それまでに受けてきた教育の根深さゆえだとも言っているのである。18章ではモルガン・ル・フェイの振舞を見て「人間はトレーニングがすべてだ」(90)と嘆き，サンディーが本当は人間であると主張する豚たちが大騒ぎするのを横目で見ながら「トレーニングの力！影響の力！教育の力！それは人間に何でも信じさせてしまう」(104)と断じている。ハンクにとって「トレーニング」は改革を進めるにあたっての障害であると同時に，改革を進める手だてでもあり，いわば両刃の剣なのだ。H. N. スミスは，19世紀後半アメリカでは社会進歩思想が「世俗的宗教」といってよい程もてはやされていたと指摘している。[11] ダーウィンの著作に興味を示し，また自分なりの神学の探求者であったトウェイン自身，こうした思想に深い関心を寄せていたことは想像に難くない。[12] しかし『コネティカットヤンキー』では，歴史の流れと共に人間社会は合理的な進歩をとげていく，という考え方は，合理性とは無縁のレベルで人間を支配する力の前に消滅してしまうのである。

ハンクが推し進めるアメリカ型「文明」による合理性教育のヨーロッパ流非合

理的伝統に対する敗北は，最後のハンク対マーリンの対決（というよりは，マーリンが一方的にハンクを陥れるのだが）の場面で象徴的に描かれる。老婆の身なりで現れたマーリンはけがをしたハンクに親切そうに近づき，隙を狙って魔法をかけると1300年の眠りにつかせる。トウェインがハンクの冒険の結末に選んだ眠りという状態は，これまでのトウェイン作品のコンテクストでいえばある種の精神の停滞を示唆するものである。とすれば，それは「進歩」の概念を否定し，歴史の非合理性を示している結末であると考えられるのではないだろうか。

さらにもう一つ問題になるのは，先に引用した「いつでもアメリカ発見のための探険隊を出発させる用意ができていた」(228)という言葉に示されるような，歴史を書き換えようとする欲求がハンクにあるとされている点である。この傲岸不遜ともいえる意気込みは，キャラクターとしてのハンク・モーガンのものというよりは，むしろトウェイン自身のものとみるべきではないのか。ハンクが彼の冒険の記録を書き付けた紙はパリンプセスト（羊皮紙は高価だったため，最初に書かれていたものの全部または一部を消して，その上に別の文を書いたもの）だということになっている。ハンクからこの原稿を受け取った「マーク・トウェイン」は次のように言う：「このヤンキー歴史家のかすれた筆跡の下に，もっと古くてもっとかすれた文字の痕跡が残っていた — どうやらラテン語の言葉や文章であるらしい。昔の僧侶たちの間に伝えられた物語の断片に違いない」(10)。既に歴史が記録されている上に重ねて後世の記録者が新たな歴史を書き付けるような，特殊な用紙が使われたという設定自体が，歴史を書き換えようとする欲求を表している。[14] そしてこの欲求は6世紀を19世紀に，南部を北部に，近づけようとする試みであり，トウェインにとっては自己の内部で分裂していた過去と現在を統合することに他ならない。後藤和彦氏は「トウェインにとってハンクはトウェイン自身の不面目な南北戦争体験を抹殺してくれる超越的ヒーローとして意図された」キャラクターであったと指摘しておられる。[15] トウェインが双生児もしくはシャム双生児を繰り返しとりあげて描いたことはよく知られているが，その中で最も早い時期に書かれたバーレスク「シャム双生児」(1875)では，南北戦争の際兄弟がそれぞれ南軍と北軍に属していて互いを人質にとっていた，という記述がある。[16] トウェインにとって，南北戦争体験も含めて自己の内部での南部と北部の相克は，自己分裂の意識を伴うものであったことは確かで，そのような内的必然性があってこその，歴史を書き換えたいという衝動なのである。トウェインがハンクに託したのは，本来は政治的・経済的プロパガンダを表明するマウスピ

ースとしての使命ではなく，むしろ自己分裂を修復して過去との和解をもたらしてくれることであり，言葉を替えれば歴史のなかでの自己の居場所を確認してくれることであったともいえるだろう。

しかし，実際にはハンクは歴史の中での存在場所を確認するどころか失ってしまう。『コネティカットヤンキー』の後味の悪さは，最後に数万の人間が死ぬということもさることながら，ハンクが6世紀にも19世紀にもどちらにもホームレスになるという結末によるところが大である。眠りから醒めて19世紀に戻ったハンクは，「マーク・トウェイン」により「一風変わった見知らぬ人」(5)と呼ばれ，また「マーク・トウェイン」に対するハンクの自己紹介は「この見知らぬ人の経歴」(8)と題されている。さらに，「ポストスクリプト」とされている部分では，「マーク・トウェイン」が「見知らぬ人の寝室に入っていった」(257)という言い方がされている。また6世紀にタイムスリップしてはじめてクラレンスに会った際の「僕はよそ者なんだ」(15)というコメントを見れば一目瞭然，ハンクは中世でも明らかに異質な存在だ。ここで「見知らぬ人」「よそ者」と訳出した本文中の言葉は「ストレンジャー」であるが，ハンクは6世紀でも19世紀でもストレンジな存在であり，つまりは歴史の孤児になるのだ。6世紀－19世紀／米南部－北部のアナロジーを考えれば，南と北との間で常に自己を規定しようとしてなしえなかったトウェイン自身の自己矛盾が窺われるのである。

ハンクの数年間の奮闘は無になるが，それは歴史が進歩していくことを示せないで終わったトウェイン自身の挫折でもある。『不思議な少年』の最後に「君がこのことに何世紀も，幾時代も，とにかくずっとずっと前からこのことに気づいていなかったなんて不思議だ！... この世界も，そこに存在するものも，夢や幻や虚構にすぎないと気がつかなかったなんて！」[17] という，人間の歴史に何の意味も価値も見いだせない絶望感が漂うようなくだりがある。ハンクやクラレンスは周囲を溝に囲まれた洞窟にたてこもってしまい，死体の山から発生する毒素のために参ってしまうのだが，新しい，より優れた社会を作ろうとして結局は自分で自分を追い込んでワナにかかってしまうような行為を繰り返してきたのが人間の歴史だという示唆を読み取ることができないだろうか。『まぬけのウィルソン』では舞台をアメリカに移してこのような営みを心理的なメカニズムとしてとらえている。[18]

しかし，実はアメリカという「新しいエデン」の建設自体が人類の歴史を新

たに書き換えようとする壮大な試みではなかったのか。『コネティカットヤンキー』の最後でハンクを追い詰めたのは自らが作り上げた「文明」が敵に利用されるのではという彼自身の恐怖だった。この恐怖は6世紀の人々がハンクを魔術師として怖れたのと大差ない。科学や常識の産物であったはずの「文明」は最終局面でその合理性を失い，非合理的な力と化してしまう。ハンクにはM.アーノルドが"interesting"と呼んだものは理解できなかったし，トウェインにもそれを越えるものが示せなかった。歴史の「進歩」が幻にすぎないと認めたとき，「この世界は夢や幻や虚構にすぎない」という『不思議な少年』の結論にトウェインは大きく傾いたものと思われる。ハンクはリアルな夢をみた，と譫言を言いながら死んでいく。「リアルな夢」のパラドックスは，一人のアメリカ人として真摯に自己を探求しようとして南北のはざまに漂う歴史の孤児トウェインの苦悩の深さを暗示しているのである。

注

本稿は1990年9月22日アメリカ文学会東京支部例会における口頭発表の原稿を修正・加筆したものである。発表を行なった際，助言を下さった方々に感謝申し上げます。

1. Judith Fetterley, "Disenchantment: Tom Sawyer in *Huckleberry Finn*," *PMLA* 87 (January 1972) : 69-74.
2. Mark Twain, *Adventures of Huckleberry Finn* (1885; U of California P, 1985) 325. 和訳は筆者。
3. Twain, *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* (1889; Norton Critical Edition, 1982). 以下同書の引用は上記により，本文引用かっこ内に引用ページ数を記すことにする。和訳は筆者。
4. トウェインは『コネティカットヤンキー』執筆中，ペイジ植字機への投資を行なっていたが，このことと作品の関係については James M. Cox, "*A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* : The Machinery of Self-Preservation," *Yale Review* 50 (1960; Norton 版に再録) で詳しく論じられている。
5. Henry Nash Smith, *Mark Twain's Fable of Progress: Political and Economic Ideas in "A Connecticut Yankee"* (New Brunswick: Rutgers UP, 1964) 88.
6. *The Autobiography of Mark Twain*, ed. Charles Neider, Perennial Library Edition (New York: Harper, 1975) 33.
7. Twain, *Life on the Mississippi* (1883; Penguin, 1984) 398. 和訳は筆者。
8. Twain, *Life on the Mississippi* 327.
9. 『コネティカットヤンキー』執筆過程と，トウェインに影響を与えた当時の社会背景に

ついてはいくつか論文があるが，John C. Gerber, *Mark Twain* (Boston: Twayne Publishers, 1988) 第9章の中に要領よくまとめられた解説がある。

10. こうした事情については Kenneth Allott 自らが編集した *Five Uncollected Essays of Matthew Arnold* (UP of Liverpool, 1953)に付した "Introduction" で触れている。
11. Matthew Arnold, "Civilization in the United States" (1888), *Five Uncollected Essays of Matthew Arnold* 52-53. 和訳は筆者。
12. Smith 82.
13. 19世紀の科学・宗教思想とトウェイン自身の思想の変遷については Sherwood Cummings, *Mark Twain and Science: Adventures of a Mind* (Baton Rouge: Louisiana State UP, 1988) に詳しい。
14. Cox, Norton Critical Edition 394.
15. Twain, "The Siamese Twins," (1875; in Charles Neider ed. *The Complete Humorous Sketches and Tales of Mark Twain*, Garden City: Doubleday, 1961) 280.
16. Kazuhiko Goto, "The Southern Fate of Humor: Mark Twain's Private Civil War in *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*," 東京女子大学『英米文学評論』第36巻(1990): 33.
17. Twain, *No. 44, The Mysterious Stranger*, ed. John S. Tuckey (Berkeley: U of California P, 1982) 186.
18. 拙論 "The Mechanism of Self-Identification and Self-Deception: A Study of Mark Twain's *Pudd'nhead Wilson*" (*Strata*, 5 〔1990〕3-26) を参照していただければ幸いである。